尾州の知と技

シリーズ5

尾州ジャカードの知と技

テキスタイル塾講師
ジャカード担当　足立征衛

尾州産地のジャカード織物は、昭和30年前後に始まりました。最初は梳毛の2／48の風通ジャカードおよび後染の無地調が中心でした。

その後、ウールの着尺で900口のジャカードが開発され、経緯太一細一で緯に別糸（縫い取り）調やジャカードで初めて送り止め（ストップ）が入った素材が、尾州でも盛んになってきました。現在でこそ、ストップ入りが尾州でも一般的ですが、当時機屋さんも、いろいろな送り止めヒモの調節をして、ストップのかかり具合を見てムラをなくす努力をされました。

昭和35年頃から、新しい糸（ポリエステル）とバルキーによって経フクレ織が始まりました。

この話で、大変な思い出があります。

A社が初めて経9,000本（吋150本）の経フクレ織で開発した花柄が、社内では

「あまり新しい織物でちょっと無理ではないか？」

という話になってしまいました。その時、B社に

「この柄をやらないか」

と担当者がB社の社長に話しました。この時、B社は問屋に取引トラブルで困っていたので、「何より」とこの話に乗ってB社が自社製品として出しました。ところが、これが大ヒットし、たちまちB社は元気になってしまった。

それから、あわててA社もこの柄をやり出したのです。あまり早くてもいいというものではないという例です。

昭和42年頃になって、加工糸が出てきました。この糸も、当時東洋レーヨン、東洋紡、川島紡などから色々なタイプが出てきて、各種の織物生産が始まりました。またレピアジャカードも少しずつ入ってきました。

経密度10,000本と12,000本（180）フォーマルスーツの後染でヒットしたのです。先染ジャカードは、今までのウールで使っていた組織より、変化の多い物を使って複合的になってきました。そして、この時から、尾州のジャカードは、他の産地と違って、色々な規格と糸使い、何でも織る技術を持ち備えてきたのです。

この頃、工賃機屋さんが、羽島地区になってきました。尾州ジャカードの影の力となって、今日のジャカードになって行くのでした。最近は、機屋さんの台数が、少しずつ減る傾向にあります。そして、機屋さんが高齢者になって、進んだ技術を持った人が少ないことが心配となっています。

そこで、最近は、若い人たちに、今のうちにこの技術を伝えておかないと尾州ジャカードが消えてしまうという危機感が生まれました。だから、アパレル業者などから注文を受けた服地を作るだけでなく、自分で魅力ある商品を開発するように人材を育成して、産地に元気を取りもどしてほしいと思います。各社がオリジナルを作る努力をして、市場に自ら提案できる商品を出すことが尾州ジャカードの生きる道であると思います。